LE DISCIPLE
ANDRÉ CORNÉLIS

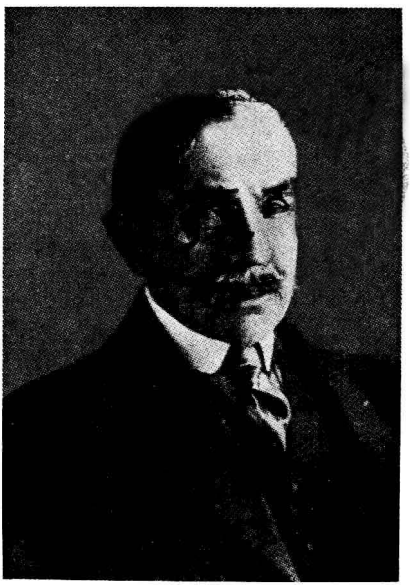
Paul Bourget

著ェジルーブ・ルーポ

子　弟

スリネルコ・レドンア

譯雄義内山



版出社潮新

第二期
世界文學全集(2)
弟子
アンドレ・コルネリス
第四回配本

非賣品

昭和五年八月廿五日印刷
昭和五年九月一日發行

飜譯者　山內義雄
發行者　佐藤義亨
東京市牛込區矢來町
發行所　新潮社
電話牛込 長八八八八〇五番 八八八〇六番 八八八〇七番 八八八〇九番
振替東京　二一三、四五〇番

東京市小石川區西江戸川町　富士印刷株式會社印刷

解說

ポール・ブールジェとその作品

十九世紀末、さしも全盛を誇つてゐたゾラ一派の自然主義文學にも、當然のこととして、その凋落の時が訪れた。現實に對し餘りにその「眞」を求め過ぎた結果、ともすれば現實の醜について、極端な寫實主義に終始する弊竇を暴露し初めた當時の文學、即ちその發散する息塞るやうな空氣に對し、こゝに必然的な反動としての文學の出現を見るに至つた。ランソン教授が「自然主義の埒外に立てる作家」として擧げたアナトール・フランス、ピエール・ロティ、ポール・ブールジェの三者のごとき、正にこの傾向を代表するところのものであつて、この中我國にもすでに十分紹介つくされてゐるフランス、ロティの二家については敢て言はず、今こゝにその傑作『弟子』を紹介しようとするわがポール・ブールジェは、佛蘭西文學史上、華々しいかゝる時期に登場を試み、しかも一方、近世佛蘭西受難史中の普佛戰爭による國民思想の動搖期を身みづから體驗し、劃期的作家として聞えた巨匠である。從來、わが國に於ける佛蘭西文學の紹介は、やゝもすれば跛行的たることを免れず、前に掲げた三人の作家の中、わづかにフランス、ロティの作品のみが紹介され、ブールジェに至つては私の知るかぎりに於て、文學史上比較的重要ならざる『青夫人』の飜譯あるに過ぎなかつた事實の如き、安逸優雅の中に沈湎して獨り樂しんでゐた我が國文學愛好者にとつて、彼の作品に示さ

れた精緻な分析の精神、高邁な社會意識、又眞劍を極めた宗教問題、思想問題、又政治問題などの提案が、如何にその好尙と相容れなかつたかの實證を示されたやうな感があつて、一種微笑を禁じ得ない。

この新らしく擡頭したブールジェの作品に示された一大特色は、前者がクロード・ベルナールの『實驗醫學研究序論』に示唆を受け、專ら人間の外面的實驗的探究に終始したに反して、ブールジェがつとめて人間心內の思想感情の機微を探り、その精密な機械的構成の祕密に參せんとし、そこにその全作の基調を置いた點に存する。卽ち彼は當時全盛を極めた自然主義の風潮に敢然として拮抗し、外面的描寫よりも寧ろ人間心內の葛藤、複雜多岐を極めた精神過程の探究に意を注ぎ、この點に於て遙かにかの『赤と黑』の作者スタンダールと呼應しながら、此處に近世佛蘭西心理解剖小說に於いて、斷然正統の座を占めることになつたのだつた。

×

フランス心理解剖小說は、十七世紀ラ・ファイエット夫人の『クレーヴ公爵夫人』にその生誕を見、その脈は十八世紀に入つて、一度び途絕えたが、十九世紀の初頭浪漫主義勃興とともに自我の發揚、それに伴ふ「我」の檢索の風潮と共に、セナンクールの『オーベルマン』、バンジャマン・コンスタンの『アドルフ』、サント・ブーブの『愛慾』等にあらはれて自傳的心理解剖小說の出現となり、スタンダールの『赤と黑』出づるに及んで、爰に初めてかのロマンティック小說に見られた奔放不羈な「自我」發顯とは遙かに趣を異にし、心理學的、分析的な近代心理小說の端を發するに至つた。十九世紀末ブールジェの出現は、これを文學史的觀點に立つて考へるとき、彼自らも認むるごとく、これをもつて、スタンダール直系の傳承者であるといふことが出來るであらう。たゞこゝに注意すべきは、スタンダールとブールジェとの間に嚴然として介在するイポリット・テーヌの存在である。テーヌによつて唱道せられ、自然主義諸作家に對

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

して、その文學理論となつた實證美學は、わがブールジェの上にも甚大な影響を與へ、スタンダールと異つた、心理學的研究の方法をもつてテーヌの所謂「心的歴史記錄」を完成し、これをもつてその一家の風となさんとした。われらはそこに、スタンダールから多くを享け、しかもそれより更に進展して當時の時代的精神を滿喫し、これを十二分に作中に顯現しようとした一個先驅者の姿を望み得ることが出來るであらう。

スタンダールからブールジェに至つた心理解剖小説の流れは、更に『根扱ぎにされた人々』の著者モーリス・バレス、女性の心理描寫に於て第一人者の稱あるマルセル・プレヴォ等の巨匠によつて現代に至り、面容は異りながらも、脈々としてマルセル・プルースト、アンドレ・ジッドの作に傳はり、そこに「偉大な佛蘭西傳統による小説」の路をつづけてゐる。

×

今ポール・ブールジェがことに立ち戻るとき、私は彼ほどその天稟の資質、又後天的の教養を自覺し、之を活用した作家あるを知らない。心理解剖小説家としての彼の成功を思ふ時、それは決して單なる靈感による思ひつき、乃至青年期に於て常に見られる文學的感激の結果によるものでなく、その基調を成してゐる後天的の訓練と、父から享けた一種遺傳的の稟性の繼承に對する明確な自覺、さうしたものによつて如何にも科學的に組上げられて行つたものであることを認めざるを得ない。此處に新時代人としてのブールジェの特質が嚴然として存在してゐるものと言はれよう。この意味に於て彼の生ひ立ちの跡をかなり詳細に亙つて述べることも、決して徒爾ではあるまい。況んやこゝに收めた『弟子』一篇、そこには隨所に彼自身の姿が描き出され、或意味に於て青年期の彼自身を語り出したものと稱されてゐるに於てをやである。

ポール・ブールジェは、一八五二年九月二日、佛蘭西北部、英佛海峽に近いソンム縣アミアン市に生れた。兩三年前新作『われらの行爲はわれらを追ふ』を書いて老來益々旺んな意氣を示したブールジェは、今年所謂喜壽の祝を迎へたわけである。父のジュスタン・ブールジェは理學士、祖父は土木技師、曾祖父は農家の出であるといふ。家系についてのこの記錄は、諸君にして一度『弟子』の主人公、痛ましき青年ロベール・グレルーの告白に接したら、その「遺傳」と名けられた章下に、殆んどこれと符節を合せた記述を見出されるであらう。

南佛アルデーシュ縣サバスの生れであつた彼の父は、當時ソンム高等中學校で數學の教師であり、その任地に於てポールをまうけた。爾來父の任地の變るにつれ、ブールジェも亦これに伴つて各地を轉々した。又母系については、母はローレーヌ州に生れ、その生家は嘗つてアルザス州に住み、遠く溯れば獨逸の血を引いてゐるものであるといふ。

かうした父系と母系の交錯から、吾人はブールジェ自身その自傳に於て述べてゐるやうに、彼自身の裡に潛むゲルマンの血による哲學者と詩人の態度、並びに明快純粹なラテンの傳統による分析家の態度を想見することが出來るであらう。

アミアンで生れたブールジェはその後父の轉任と共にストラスブールに移るに及んで、初めて讀書を知り、一方その母系なるゲルマンの感化を受け、つづいて父がクレルモン・フェランの理科大學教授となるに至つて、その生國に近きオーヴェルニュの土の香に接した。彼の學校生活は、このクレルモン在住の頃に初まる。當時父が彼に與へた科學的教育、それこそは、とりもなほさず後年のブールジェを作り上げた所のもの、『弟子』に描き出された宇宙生成の物語、さては植物の分布、昆蟲の分類などに亙つた巨細な解說は、移して以てブールジェ自身の思ひ出に外ならぬと考へるこ

とも出來るであらう。また彼自身の語るところによれば、當時父によつて示された、昆蟲標本に興味を喚られた彼は、たとひ漠然たるものであつたにしても、オーヴェルニュ一帶の昆蟲に關して、何か著述を試みたいといふ氣持を抱いたことがあつたといふ。同じく『弟子』の中に語られてゐる一節、即ち主人公が沙翁の作品を耽讀する條も、また當時のブールジェ自身のことを語り出してゐるものに外ならない。かうしたクレルモン在住の間に於て、この異常な天稟にめぐまれた少年の頭には、父による周到な科學的訓練と、一方海を越えての偉大な詩人の想像力とが共に羨むべき均衡を保つて植ゑつけられて行つたであらうことは想像するに難くない。その後父が巴里サント・バルブ高等中學校長となつて轉任するに及び、彼もまた同中學に轉校し、恰も一八七〇年、あの普佛戰爭の勃發による暗憺たる幾月かを經驗することとなつた。『弟子』の冒頭「青年に寄す」と題した一文（本譯書にはこれを省く）中に見らるゝ如く彼は「巴里のうへに轟きわたる砲聲を耳にしながら最初の詩、最初の散文を書き散らし」、一方その年長者達が戰場に赴くのを見送りながら、「今は半ば空になつた教室の隅、祖國再興の重任が自分達の双肩に重くのしかゝるのを感じた」といふ時代がそれであつた。この普佛戰爭による苦い經驗、これこそは彼をして後年『弟子』一篇を書き上げるに到らしめた重大な原因、即ち彼は「外面に於ける勝利と敗北とはこれとりもなほさず內面に於ける優秀と不足との現はれに過ぎない」と觀じ、十九世紀初頭に於けるドイツの復興は、要するにこれ一つの偉大な精神的所產であり、一八七〇年のフランスはまさに大いなる瘡痍に心身を打ち碎かれ、これが恢復の任は來るべき若き人々の双肩にあり、しかもこれら若き人々に讀まるべき吾人文筆にたゞさはる士は、果して如何なる責任を以て之に臨むべきかといふことを闡明しようとしたものに他ならなかつた。

かくて一八七二年彼は文學士となり、その後引續いて大學院に入り、希臘言語學の研究に志したが、やがてその心

に文學的好尙の湧き起ると共に、決然文筆を以て立つことになつた。

少年期から青年期にかけて、この轉々として居所を變へたブールジェの生活、評家はそこに、彼の作中にあらはれてゐるコスモポリティスムの傾向、またこれを大にしては彼に見られる內面世界の尊重、從つて外形的方面輕視の傾向の主なる原因を求めようとする。その鄕國についての深い印象に惠まれなかつた彼として、いきほひ形體よりはむしろ思想に、外形よりは寧ろ感情に卽しようとするに至つたことも、極めて當然のことと言はるべく、彼にあつては、その故鄕とは、とりもなほさず思想の世界であつたと云ふ評家の言の如何にも當れることを思はせる。彼が自ら語つて「自分に於いて基調をなしてゐる能力は、卽ちわが師テーヌの所謂感情の想像である。自分は形體想起の能力に乏しく、一つの場所、一つの書面、一つの彫像を思ひ起し、或ひは二三度しか會つたことのない人の髮の色、眼の色について語らなければならないとき、いつも非常な困難を感じる。それに反して、事一たび自分の受けた一寸した感動を思ひ起す場合、自分にはそれがたとひ餘程以前のことであらうと、しかも生々(いきく)としてこれを記憶の裡に喚び起すことが出來るのだ」と言つてゐる如き、讀者はかうした性癖を『弟子』の篇中、外部世界のことに關する限り、日々の新聞にさへ目を通さないといふ奇矯な哲學者アドリアン・シクスト先生を通じて語られてゐるのを耳にするであらう。

×

多くの文人の場合に於て常に然りしごとく、ブールジェの文壇的生活もまた最初詩人として初められた。一八七二年から一八八二年にかけて世に公けにされた詩集四篇、卽ち『海邊』、『不安なる人生』、『エデル』、『告白』。極言すればこれらすべての詩作は、決して後年のブールジェに對し、その光榮に何物かを附け加へるところのものではない。措辭の洗煉、格調の正しさを擧ぐるにしても、その裏に認められるあまりに安易な詩的陶醉は、彼がクレルモン時代愛

誦したと稱せられるアルフレッド・ドゥ・ミュッセの惡影響、若くは海を越えてのシェレー、ロゼッティが空しい衒を傳へてゐるに過ぎず、これをもつてオギュスト・ドルシャンの徒と聲を一にして詩人たるブールジェを認めることは些か輕卒に過ぎる感無きを得ない。

心理解剖家ポール・ブールジェの眞骨頂はその論集『現代心理論集』に初まる。これこそは當代批評壇に於ける實に卓越した一つの收穫で、卷中ボードレール、ルナン、フローベール、スタンダール、テーヌ、デュマ(子)、ツルゲネフ、ルコント・ドゥ・リール、アミエル、ゴンクール兄弟に關する論攷を收めてゐる。しかも、ブールジェは、これら偉大なる作家思想家を以て、單に彼等をその文人たる性質に於て批評論究せず、テーヌが所謂「文學とはこれ一つの生きたる心理學に他ならず」といつた原則に出發して、彼等を人間精神の鍛錬者たる立場に於て考察し、これら文人に表現せられた精神狀態の探究を以て目的とした點に存在する。彼はこゝに選び上げたこれら文人を研究するにあたり、單に客觀的立場によつて彼等の天分、彼等の技巧の妙を推測論辯することをせず、要するにブールジェ自身の感情好尙の代辯者に過ぎざるものと觀じ、これらさまざまの文人の性情の相違により、さまざまな形態によつて表現せられるブールジェ自身の感情、乃至この人生の姿をそこに洞察せんと試みたものに他ならなかつた。

これら作品の研究を通じ、これら作家の心理分析を通じてそこに鮮かな彼自身の心理展開を認識し得たブールジェは、今や更に直截端的な方法によつて、それらの心理の根源を成す人生自體の分析檢討に向つて一歩踏み出さうと試みた。そしてかうした試みのため、その最も適當な形式として選ばれたところのもの、即ち小說であつた。

×

ブールジェの小說はその傑作『弟子』を境界として第一期と第二期に分たれるのを通例とする。ひとしく精緻な心理

分析に終始してゐる彼の小説といつても、その第一期に屬するものの特色は、作品全體に漲りわたつてゐる。ディレッタンティスムの傾向、並びにその底に潜む一種の悲觀的態度である。處女作として、かなりな反響を惹き起した『償ひがたきこと』を初めとしてそれに續く諸作に於て、吾人は彼が『現代心理論集』により十二分に研鑽し得たところの犀利な心理解剖の適用に驚かされるとともに、後年の彼を知るものとして同じく怪訝の念を禁じ得ざるほど溫柔な世界への惑溺を見せられる。そこに描き出されたものは、概ね上流社會に見られる戀愛葛藤であり、それらは往々にして心理分析を弄んで、行手には何等の希望を認めず、好んで不德放縱の裡に墮し去つてゐる趣なしといふことが出來ない。惟ふに普佛戰爭の後を承けて極度に萎靡し去つた當時のフランス國民全體の氣風の反映を承け、他方にはその少年期青年期を通じ、澎湃として漲りわたつてゐた科學萬能の風潮の餘波を承けて從來の信仰を失ひ、更に當時の作品を手當り次第に耽讀したことによつて極度にその頭腦を荒されたブールジェにとつて、かうしたディレッタンティスムの態度こそ寧ろ當然のこととして認めざるを得ないであらう。この間の消息は、これ亦『弟子』の中に彼によつて詳密に叙述せられてある。即ち「遺傳」並びに「わが思想環境」の篇に於て彼が記すところは、當時の彼の僞らざる自傳的記述と考へて然るべきものと云はれる。かうした時期に於て彼の初期の名作『痛ましき謎』、『戀の罪』、『アンドレ・コルネリス』、『嘘』などの諸作が公けにされた。

『アンドレ・コルネリス』は一八八七年世に問はれたところのもの、彼一流の微妙複雜を極めた心理過程の描寫は漸くその爛熟境に入り、一方その題材が、如何にも悲痛な探偵小説的事實の上に組立られてゐたことによつて、異常な感激を喚び起したものであつた。幼にして突然父の横死に際會したアンドレ・コルネリスが、その後間もなく母と結婚するに至つた父の親友ジャック・テルモンドに對する直覺的な疑惑、その疑惑を中心として組立てられる執拗な檢索、遂に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

父殺しの事實を突きとめ、これに周到な復讐を試みるに至るまでの心理描寫は、實に驚くべきほどな緊縛力の强さを示して、全篇些かの搖ぎもなく、心理解剖小說家としての彼の面目を躍如たらしめてゐる。

傑作『弟子』は前者に後るゝこと二年、即ち一八八九年に上梓せられて、劃時代的な反響を惹起したところのものであつた。有名な「ブールジェ論」の學者ヴィクトル・ジローの言葉を借りて言へば、正に前世紀末フランスの倫理史上に一大時期を劃したところの所產であり、これを中心としてアナトール・フランス、ブリュンティエールの間の激しい論爭となり、當時の青年は爭つてこの書を讀んで互ひに激論を鬪はし、或ひは口舌に、或ひは文筆に、止むこと知らぬ論議を醸し、恐らくかうした種類の出版物として思想上、精神上、また良心上、かくまで異常な影響を齎し、かくまで重大な動搖を惹起したものなかるべしとさへ言はれるほどな反響を生むに至つた。

現代フランスのスペンサーと呼ばれてゐる老哲學者アドリアン・シクストは、その專門以外のことについては何等の興味も持たず、新聞さへも嘗て手にしたことがないと言はれるほどに非社會的な一學究であつたが、その書齋裡に書き上げられた一篇の「情慾論」は、これを讀んで啓示を受け、その後巴里に兩三度シクストを訪ねてその說を聞き、しかも爾來シクストの記憶からは忘られながら自らはその「弟子」をもつて任じてゐた天才的な青年ロベール・グレルーの上に種を下して、そこに異常な展開を示すことになつた　即ち青年は飽くまでも科學の絕對神聖を信じ、恰も一般の自然科學の研究に於て、實驗が許されるがごとく、戀愛の研究に關しても當然實驗の許さるべきことを考へ、ここにその實驗の相手方として自ら住み込んだ侯爵家の令孃シャルロットを選び、誘惑に引き續く令孃の自殺によつて殺人の嫌疑に問はれた。青年が獄中から寄せた告白、並びに實驗記錄を手にすることにより、初めてさうした悲劇の原因が自らにあつたことを悟つたシクストの懊惱、こゝに彼の眼に示された學問對社會の問題、これこそは『弟子』一

卷の經緯をなすところのものであつて、アドリアン・シクストとは當時フランス思想界に偉大な勢力を示してゐたテーヌ自身をモデルとしたもの、ブールジェはその社會人たる立場、又フランス國民たる立場に立つて一の詰問を試み、この書を提げてルナン、テーヌ等の說に承けて今や危險な學問上のディレッタンティスムに陷らんとしつゝあつた祖國の青年に向ひ、一大警告の叫びを發したものと言はれてゐる。學者思想家がその書齋裡にあつての研究は自由である。然るに彼が一旦その研究を提げてこれを世に問はんとするに當り、彼はそれより生ずべき影響につき、果して責任ありや無しや？　この問題に對する作者ブールジェの解答は、これを直接『弟子』について求められんことを希望する。

但し讀者はこの解答を求むるに先ち、ブールジェがこの「問題の書」を世に問うた當時のフランス、即ち普佛戰爭による瘡痍癒えず、精神的思想的に或る種の混迷狀態を續けてゐたフランス青年達を思ひ浮べなければならない。その間の消息はこれ亦彼の「青年に寄する」一文中にある左の記述から考へて讀者は之を容易く理解されることを信ずる。

「現代に於ける若きフランスの青年よ。諸君は肉慾の世界に惑溺する粗暴なる實利主義者に墮するなかれ。また智的情的兩方面の世界に亙り、これを濫用して憚らぬ倨傲なる詭辯論者（ソフィスト）、年若くして害（そこな）はれたる詭辯論者ともなるなかれ。人生に對する傲慢心から或ひは一個の冷嘲家となり終り、知識に對する傲慢心から思想を弄んで顧みぬものともなるなかれ。今道義紊れ、諸說互ひに相反噬する時に際し、宜しく諸君はかの聖書の言葉『樹はその果（み）に因（よ）りて知（しる）べし』とあるに則（のつと）り、これを救ひの杖として倚り賴むべきである。世に、一つの實在がある。これこそは諸君が疑ひ得ないところのもの、現に諸君がそれを有し、それを感じ、常にその眼に眺めてゐるところのもの、諸君の心、即ちこれである。諸君の身に迫る數多の思想の中には、或ひはこの心の有する愛の力、またその意思の力を稀薄ならしめるものがある。これらの思想はたとひ一見如何に微妙を極め、如何なる大家の名によつて主張され、如何な

る天才の魔術によつて飾られるにせよ、只この一點に於てその虚僞なることを確信するがいゝ。諸君はその心に有する二つの偉大な德、二つの精力、それを他にしては現時にあつては萎靡憔悴、究極としては臨終の斷末魔しか豫想し得ない、卽ち愛と意志とを昂揚し、そしてこれを育め！」

『弟子』を轉機として、從來只微妙なる心理解剖小說の作家たるに止つてゐたブールジェは、その心理學者たる態度に代ふるに堅固なる倫理學者たる態度、並びに嚴正なる人心と社會との批判家たる態度を以てし、これを貫くに堅實なる一道の宗敎的意識を以てして今日に及んでゐる。『離婚』、『正午の惡魔』、『死の意義』等のほか、デモクラシーに對する檢討を志した大作『舍營』などをこの期に屬する代表作とする。今はただ本集輯錄するもののみの解說にとゞめて、餘はこれを他日に讓ることとしよう。

私が初めてこの飜譯を試みたのは今を去る五年前、當時手に入つたプロン・ヌリ社發行の流布本によつて譯了し、全部の校正刷まで手にしながら所々に不滿の個所多く、そのまま版を解いて了つたが、今回同社刊行決定版と照合校訂の上、改めて印刷に附することとなつた次第である。尙、『弟子』は從來屢々飜譯を試みた人があつたが、何れもその完成を見なかつた。偶〻本書成らんとするに當り、福岡高等學校敎授山田原實氏、及び早大の齋藤一寛氏がこの全譯原稿を所持せらるゝことを知つた。而も拙譯出版について兩氏から慫慂激勵の辭を戴いたことは、感謝に堪へないところである。（山内義雄）

目次

弟子……一
アンドレ・コルネリス……二四九
（附・三篇）
息子……四四九
手引をする女……四六三
脅迫……四八一

カヴァーの絵……「弟子」の主人公ロベールと侯爵令嬢シャルロット。

弟子

ポール・ブールジェ作
山内義雄譯

第一　ある現代の哲學者

一般に信じられてゐる言ひ傳へによると、ケーニヒスベルヒの市民達は、哲學者エマヌエル・カントがその毎日の散歩路を變へたといふだけで、一つの驚くべき出來事が文明社會を覆へしたことを推察したとか。有名な『純粹理性批判』の著者は、丁度その日、あの佛蘭西大革命の勃發を知つたのだつた。

かうした素樸な驚きといふ點から考へたら、巴里のやうな都會は至つて不向といはなければならない。ところがここに我がギー・ド・ラ・ブロッスの町の人々の幾人かは、一八八七年一月のある日の午後、老儒カントに比してその名こそ夫れほど高名でないにせよ、その分析の態度に於てカント以上に破壞的たりしとともに、行住坐臥に於てひとしく奇矯を極めてゐた我がアドリアン・シクスト先生、かの英吉利人が好んで「佛蘭西のスペンサー」と呼んでゐた我が哲學者が、かれこれ午後の一時頃、町に出懸けて行く姿をみて、殆どあのカントの場合に於けると同じやうな驚きを覺えたのだつた。

この場合に直ぐお話して置いた方がいゝと思ふが、ジュシウからリンネ町に續いてゐるこのギー・ド・ラ・ブロッスの町は、植物園、慈善病院、葡萄酒貯藏庫、聖ジュヌヴィエーヴのお山へ上る坂町などで圍まれたひとつの小さな田舍町とでも云つたやうな一廓に屬してゐる。といふことからしてこの町のなかにあつては、あの往ふさ來るさの賑ひがいつも車や往來の人の波を變へてゐる都會目貫きの町とは異り、一寸一わたり見渡しただけで、日頃見馴れたさまざまな物を見出すことが出來た。此處に住んでゐるものは小官吏の古手だとか慎ましやかな教員だとか、博物館の雇、その他勉强ざかりの學生、拉甸街の誘惑から逃れて身のまはりを閑寂にしてゐたいと思ふ若い文學者といつたやうな

手合である。店屋は中々繁昌してゐてその顧客は場末町に於けると同じやうにちやんと定つてゐる。「麵麭屋」「肉屋」「乾物屋」「洗濯屋」「藥種屋」など、それらの店々の名前は買物に出懸ける召使どもによつて、常も單數で呼ばれてゐる。グラシエールの乘合馬車が分けて通り、植物園の記念だといふあの巫山戯た姿の動物をつけた噴水によつて飾られてゐるこの町の家々の間には、競爭などゝいふものは殆ど見られない。植物園へ來た人々が病院の方に向つた戸口からこの町の方に流れ出て來ることなども至つて稀だ。從つて春になつて天氣のいゝ日が續くころになつても、そして兵隊さんや乳母などが喜んで遊びに行くあの植物園の宵みがかつた樹々の下に人波が寄せて來るころになつても、リンネ町は平素のやうにひつそり閑としてゐて、これにつゞく他の町々に至つては更に云ふまでもない。かうして巴里でも除けものにされたやうなこのあたりに、たまに見なれない人波の寄せて來ることがあるとすれば、それは慈善病院の門口が、入院患者の見舞人に向つて開かれるときである。その日には町の歩道のうへに、貧しげな、そして悲しさうな顏の行列が續く。かうした貧しい人々の行列は病院の古壁の向うに苦しんでゐる親類緣者のために砂糖菓子などを持つてやつて來るので、町の一階に住んでゐる人たちや門番詰所の人達、それに店屋の人たちなど、ついぞ見まちがへたりすることがない。そして町の人々の注意は、かうした臨時の人達の上には注がれず、專ら毎日同じ時刻に往來に姿を現はす人達ばかりに向けられてゐた。そんなわけで雞鶏の鳴き聲、象の唸り聲、鶯の高鳴き、虎の鳴き聲と云つたやうに、つい隣り合せの動物園から折々獸の荒々しい叫び聲が響きわたるこの町にあつて、そこに店を張つてゐるもの、また門番をしてゐるものたちは、まるで野原のなかにゐる獵師とでもいつたやうに、町を往來する人の姿によつて、はつきりした時間を推しはかることが出來るのだつた。茶色になつた革の古鞄を小脇にかゝへ、せかせかして買ひ求めた二錢の三日月パンを横目でチョイ〳〵ながめながら、あの出張教授の先生が小刻み足に歩いてくる姿が見えると、この町の隱密共には、丁度いま八時が鳴るところだなといふことが分つた。莫寸屋のボーイが布をかけた皿をいくつか抱へて出て來るのがみえると、ははあ、今はかれこれ十一時で、獨りぼつちであそこの家の六階に住んでゐる退職の少佐殿がこれから晝飯を召上るところだなといふことが分る。こんな風に、以下之に準じて一日の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com